
神風怪盗ジャンヌ 第零章地上に舞い降りた天使

工藤 太一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神風怪盗ジャンヌ 第零章地上に舞い降りた天使

【Zコード】

Z6837Q

【作者名】

工藤 太一

【あらすじ】

日下部まろんはマンションで一人暮らしをする女の子。

彼女は、中学の卒業式の夜に不思議な妖精のような生き物と出会う。彼女は準天使のフィン・フィッシュ。悪魔を倒すためにジャンヌ・ダルクの生まれ変わりのまろんを探していた。世界の危機を救うために彼女は怪盗ジャンヌとなつて悪魔と戦うことに決意する。

(前書き)

この小説は物語の主人公の日下部まろんちゃんが可憐な準天使フインちゃんと出会ったときで、主要ヒーローのシンンドバッドこと名古屋稚空くんと出会う前のお話です。

未熟で多少時間がかかりますが、精一杯頑張ります。

桃栗中学校卒業式

「日下部まろんくん。」

「はい。」

名前を呼ばれた背まである茶色いロングヘアのシーサイドアップの少女は舞台に立つて校長先生から卒業証書を貰つてお辞儀をしました。

彼女は日下部まろん。今日で桃栗中学を卒業しました。彼女は幼稚園の頃から両親と離れて暮らしています。そんな彼女をだいじにしているのは・・・。

「東大寺都くん。」

「はい。」

背まである長い黒髪の少女は卒業証書を受け取り、お辞儀をしました。

名前は東大寺都。まろんの幼稚園の頃からの幼馴染です。彼女は、当初はかなりのツッパリで友達はできなかつたのですが、まろんと出会つてから素直な性質になつてきました。

生徒達は、式を済ませて記念写真を撮ることになりました。

「まろーん。一緒に写真をとろう。」

「うん。わかった。」

クラスメートに促されてまろんはクラスの少人数と写真を撮りました。中には、都も混ざっています。

卒業式から帰ってきたまろんはマンションの自分の部屋のメールボックスを見ました。彼女は朝と夕方にメールボックスを見ては両親の手紙がきているかどうか確認します。でも、両親の手紙はありません。

「はー、今日も来てないか。」

まろんはため息をつくと自分の部屋に帰りました。

帰宅したまろんは、家中に電気もつけずにセーラー服から白いドレスに着替えて自分のベッドに転がり込みました。

「はー、お父さんとお母さん今頃どうしているんだろ?」

まろんは、机の上の写真を見ました。そこには、幼い自分と優しそうな両親が移っています。彼女の両親はまろんが幼稚園に入るまでは仲良しでした。両親の思い出のある遊園地に行ったり、商店街のレストランで食事をしたり、お買い物したりしました。それが彼女が幼稚園の時に喧嘩をしてしまったうそれぞの国に家出してしまいました。それから彼女は母の知り合いに育ててもらっていました。ちなみに現在は元の実家で1人暮らしをしています。

まろんはちょっと、気晴らしに散歩にでかけました。

まろんは両親の思い出のある遊園地に行きました。此処にくればほつとすると思つたからです。

「はー、此処にくると気持ちが落ち着くわ。」

まろんは両親が出て行つてからいつも友達と此処で遊んでいます。特にメリーゴーランドは最高の思い出です。

まろんはベンチに座つて星空を眺めました。その時、まろんの前に可愛い妖精のような少女がゆりの花を持つて話しかけました。

「じんにちわ。田下部まろん。」

「え、誰?」

その少女は背に白鳥のような羽を生やして、緑のショートヘアを持つています。

「私は、準天使のフイン・フィッシュ。初めましてまろん、貴方に告げることがあるの。」

まろんはフインを連れて帰宅しました。

「えーっと、フイン・フィッシュだったかな?」

「フインて呼んで。実はね、今世界が闇に覆われようとしているのよ。」

「どういうこと? 実はね、悪魔は心の美しい人の大事な芸術品に取り付いてその持ち主を操るうとしているんだよ。魔王はその人の美しい心をとらうとしているのよ。第一そのままにしておいたら悪魔に取り付かれた人は死んじゃうんだよ。」

「それで如何するの?」

「簡単よ。」

フインは額の飾りからオパールがはめ込まれた十字架とスイッチのようなものを取り出しました。まろんはその一つを手に取りました。

「これは?」

「ロザリオとブティックレア。ロザリオは変身道具で、ブティックレアはいろんな道具を出したり、悪魔の反応を示すこともできるんだよ。」

「変身つて?」

「ジャンヌだよ。ジャンヌ・ダルクは神様に守られてイギリス兵と勇敢に戦つたのに、悪魔のせいで火あぶりになっちゃつたんだ。それでまろんがジャンヌの意志をついで世界を守るんだよ。ジャンヌ・ダルクの生まれ変わりであるまろんにしか出来ないんだよ。」

「私が、フランスの英雄の生まれ変わり?」

「そうだよ。まろんがジャンヌになつて、美術品に潜む悪魔をブティックレアの中のピンで悪魔をチェック・メイトするんだよ。悪魔は取り付いている美術品」ととチエス駒になるんだ。」

「それでチエス駒はどうするの?」

「回収するの。そのチエス駒は神様のパワー増幅の為にひとつおくから。」

「数え切れない悪魔全部を封印して神様に捧げるの。」

「そういうこと、私は神様の命令で地上に降りてきたんだ。そうすれば、御褒美に私を正天使にしてくれるんだ。」

「話は判つたけど、私のしていることは泥棒じゃない。ジャンヌになんてなれない。夜が怖いの。私は独りぼつ。」

まろんは膝に顔を埋めます。まろんは夜と孤独が嫌いです。フインはまろんを励ывает。

「何言つてるの！？ まろんにはフインがいるじゃない！ フインはいつだってまろんと一緒にだよ！」

「フイン。」

「そういえば、まろんに家族はいないの。だつたら今田からフインが家族だよ。」

「家族？」

「そう、だから私を信じて。神様はいつだってまろんを見守つてるよ。」

「・・・判つた。・・・」

「それじゃ、待つてて。準備をしてくる〜〜〜」

フインは窓から飛んでいつてしましました。

「ちょっと、待つてよ！ フイン

まろんは追いかけるがフインの姿はもういません。

「行つちやつた・・・。」

準備とは、どんな準備でしょうか。

まろんや都が通つていた中学校の近くに博物館があります。館長は誰にでも親切で弱い人をみると自分の骨董品を見せてくれます。骨董品はどれも館長にとつては宝物でそのうちの一つの埴輪は町の人々に幸運をよせるほど大事なものです。

「もうすぐ、わたしが発表する第繩文展が開催される。そしてこの埴輪は桃栗町の人々を笑顔をもたらしてくれる。取り替えるのはとても勿体無い。」

急に埴輪の目から黒いオーラが出てしまい、館長はそのオーラに取り込まれて人が変わってしまいました。その様子を見ていたフインは額の飾りから一枚の紙を出しました。その館長の頭の上に落

とじてまろんのマンションに元を返します。

家では、まろんがクリーミムシチューを作っています。今日からフインも一緒にだからいつもよりちょっとと余めに作っています。そこへフインが帰ってきました。

「ハロー！マローン！」

「お帰りなさい。何してたの？」

まろんと食事をしながらフインは語ります。

「予告状？やっぱり泥棒をするの？」

「そういうこと、悪魔だけ取り除くことは不可能だから盗むってことになつたの。」

「怪盗ってことは、警察もくるんでしょう。これは、厄介だわ。」

「何、言つてゐるの？ 予告では、今日の九時までにいかなくちやいけないのよ。」

「なんですつて～～～～！ 九時までにことは～～～！」

まろんは時計をみるともう7時半です。あと、1時間半しかありません。

「ご飯を食べたら出発よ

！」

一人は大急ぎでご飯を食べて後片付けして出かけました。

まろんはフインの指示に従つて桃栗中学に来ました。目的地まで近いからです。

「なるほど、博物館の埴輪に悪魔が取り付いていたんだわ。」

「それを封印すればいいのよ。ブティクレアとロザリオは持つた

わね？」

「ええ。」

彼女はちゃんとフインにもらった例のロザリオとブティクレアを持つています。

「このブティクレアを頼りに悪魔を探せばいいのね。」

「そういうこと。行くわよ。」

フィンは額の宝石から光をロザリオに向けて放ちます。変身するには彼女の力が必要です。

「ああ、まろん変身よ。」

まろんはロザリオに祈りを込めます。

「ジャンヌ・ダルクよ。力を貸して・・・。」

まろんの体は光に包まれました。光の中から和洋折衷の衣装を纏つた腰まである金髪を赤いリボンでポニー・テールにした少女が表れました。

「強気に、本気。無敵に、素敵。元気に、勇氣。」

まろんは怪盗ジャンヌに変身しました。

ジャンヌは時計塔の頂上に着きました。

ジャンヌは壁に身を潜めました。下には数人の警察と警備員がいます。下手をすれば捕まってしまう恐れがあるからです。

「やつぱり駄目。泥棒なんて無理。」

弱気になるジャンヌをフィンは励みます。

「まろんなら絶対大丈夫！」

「本当?信じていいの?」

心配なまろんにフィンは頷きます。

「天使は嘘付かない!」

下では男性がジャンヌの予告状を読んでいます。

「『桃栗博物館の館長さんへ

今夜9時に貴方の埴輪の素顔の美しさを頂きます。

神風怪盗ジャンヌ』だつてよ。変な怪盗が出てきたぜ。」

男性と一緒に長い黒髪の少女が腕組して難しい顔をしています。

「ジャンヌだか、ジャンプだか知らないけど。埴輪の笑顔も桃栗町の人たちの笑顔も守つてやる。」

「それでも都なんでお前が俺についてきてるんだ。」

「だつて、お父さん1人だと頼りないんだもん。それにアタシの夢は刑事になることだから。」

実はこの男性は東大寺氷室という刑事さんで都の父親だつたのです。そして少女はまろんの幼馴染の都でした。

どうやら館長が警察を寄越したそつです。そして刑事になることを夢見る都もついてきました。

そこへ4人の個性的な男性刑事が駆けつけてきました。大柄な刑事は春田。若々しい刑事は夏田。セミショートカーリーの刑事は秋田。そしてサングラスが特徴な刑事は冬田と名です。

「東大寺刑事、ジャンヌとは一体何者でしょうか。」

「たあな。今回は初めてだからな。」

ジャンヌとフィンはもう博物館の前に来ていた。

「あらり、おじさまに都。さうか、都のお父さんは刑事だつたんだ。」

「これは、ぐずぐずしていられないわ。行きましょう。ジャンヌ。」

「判つた。」

ジャンヌはプティクレアから紐付きのソフトボールを出しました。これがリバンド・ボールです。ジャンヌはリバンド・ボールをすぐ投げました。それが都の長い髪を掠りました。髪は項のところから離れて下に落ちてしまいました。

都是頭を押えます。髪の毛はつなじのところからぱつぱつと切れてしましました。

「キヤ ! アタシの髪が !」

都が大騒ぎしているうちに警察と警備員が騒ぎを聞きつけて大混乱になりました。ボールは地面に付着してジャンヌはそれを逃つて降りてきました。

「あらり、やちやつた。都ごめんね。」

着地したジャンヌはこそと警察や警備員をやすやすと通り抜

けました。

ジャンヌとフィンはまく博物館に潜入しました。パーティクレアは本当に悪魔に反応しています。

「やつぱり、こっちのほうにあるんだわ。今度、館長さんが埴輪を見てくれるんだから。埴輪がどこにいるかも判ってんだから。」

「ですが、ジャンヌ冴えてる。パーティクレアからフィンの声がしました。宝石にフィンの顔が写っている。」

「何、フィン。これから声を出してるの？」

言い忘れたけど、これは私と通信もできるようになつてるんだ。

「え、なんですか？どうして早く言わないの？危うくフィンを探す羽目になるとこるじゃないの？」

えへ、はじめんなさい。

フィンは拳で自分の頭を小突きました。

そこへ、警備員が近づいてきてジャンヌは更衣室に隠れました。

更衣室でジャンヌはフィンと連絡を取っています。

「それで、フィンは今何処よ？」

「館長室よ。館長は、埴輪をジャンヌに取られないようにこいつ

り持ち出したのよ。」

「まったく、これは潜入以外の方法がないじゃないの。

「どうじょう。」

そのとき、女性警備員の足音が遠くから響いてきました。

「まづい、女性警備員だ。どうじょう、このまま捕まつたら明日の桃栗高校の高校入試にいけないよ。どうしたらいいの。」

その時、ジャンヌはあることに閃きました。近くにロープや鍼や布テープのはいったダンボールがあります。

「そうだ。」

ジャンヌはダンボールから、数mもあるロープを引っ張り出してガムテープもだしてそれを片腕で胸に抱えてロッカーのドアをもう片方の腕で閉めました。

女性警備員は更衣室に入つてきました。そろそろ、仕事を終えて着替えて帰宅するところでしょう。女性はロッカーを開けました。するとジャンヌの拳が溝にあたり、女性は気を失いました。ジャンヌは素早く女性の服を剥ぎ取り着替えて、彼女を簣巻にしました。幸いロープは女性を拘束するのにちょうどいい長さでした。それからガムテープを3本引きちぎり女性の口と両耳の塞いでロッカーに押し込んでドアを閉めて更衣室を後にしました。

館長室では館長が埴輪を見つめています。埴輪の目は黒く光っています。

「この埴輪は私が守る。絶対にだ。」

「ジャンヌつたら、何をしているのかしら。」

上空では、フインが館長を見守っています。幸い天使はジャンヌの生まれ変わりのまろんしか見えませんが、それでもばれる恐れがあるので隠れることもあります。

館長室から”コンコン”とノックがします。館長は埴輪を机に置いて開けて見ると警備員の女性が立っています。

「どうしたんだね。キミはもう帰つていいんだよ。」

「そういうわけには参りません。仕事はこれからですから。」

そういうと館長の溝に拳を伸ばして気絶させました。さすがの埴輪は怒っているかのように目を吊り上げて宙に浮くと女性に襲い掛かってきました。女性は衣服を脱ぎ捨てます。服にかかったのか埴輪は動けなくなりました。その後を正体を現したジャンヌがリバンド・ボールの紐で埴輪を拘束しました。ジャンヌはブティクリアからピンを取り出して針を埴輪の向けてます。

「神の名の元に、闇より生まれし悪しき者を、此處に封印せん！ チェック・メイト！」

ピンは埴輪の背に刺さり悪魔を呻きをあげながら埴輪と一緒に消滅してチエスに使う白い駒になりました。

「」の駒をフィンが抱えました。

「回収完了！逃げるわよ、ジャンヌ！」

「逃げましょ、フィン！」

リバンド・ボールを天井の格子に貼り付けて格子をはずして二人はその穴の中に逃げ込みました。その後、屋根から木に飛び移り自分がマンションに逃げ帰りました。そこを警察官が見ていたのと露知らずに。

「いたぞ！あれがジャンヌだ！」

ようやく、警備員が駆けつけた頃には館長が気を失つて倒れていました。

「館長、館長。」

警備員に起こされた館長は目を覚ました。

「あれ、私は一体何をしていたのだろうか・・・・？」

館長は悪魔に操られていたことを覚えてはいないのでした。さすがの警備員は？と不思議そうに思つのでした。

一方更衣室では女性警備員がジャンヌに征服を奪われて口や目をガムテープで塞がれて半裸で縛られてロッカーに監禁されていたところを警察に救助されて東大寺刑事に上着をかけてもらつていました。

都は長い髪を切られて、悔しくなつて地たん場を踏んでいます。

「怪盗ジャンヌめ　　！今度会つた時は、とつ捕まえてアタシの髪の弁償をさせてやるわ　　！」

「お前、長かつた髪を切られたことを根に持つてゐな・・・。」

東大寺刑事は呆れています。

「当たり前でしょう！髪は女の命なんだから！」

そこへ警察官の一人が出てきました。どうやら結局ジャンヌに逃

げられてしまつたようです。

「刑事、怪盗ジャンヌの特徴が判りました。」

警察官は一応ジャンヌを写真を撮つたから、特徴だけでも覚える氣です。

「なるほど、この子がジャンヌか。特徴が判れば十分だ。みんな怪盗といつのは時には変装だつてして盗みだつてするそุดだから、絶対に氣を付けるよつ。」

「判つてるわよ。今度からはトラップでもしかけようつと。」

ひつしてジャンヌと都と悪魔の三つ巴が始まりました。

ジャンヌとフィンはマンションの近くの木に身を潜めました。ジャンヌは回収した白いチェス駒を眺めました。

「この駒を神様に差し出せばいいのね。」

「そういうこと。まだどこかにうじやうじやといるから全部封印してその集めたチェス駒を神様に届ければ語褒美に私は正天使になれるんだから。」

「その準天使とか正天使って一体なんなの?」

「あれ、言つてなかつたつけ? 天使の形態だよ。生まれたばかりの黒天使、第2段階の準天使、第3段階の正天使、そして最高位の大天使。それがフィンたち天使の段階なんだよ。」

「えーっと、フィンが準天使つてことは、第2段階で次に変化するるのは第3段階か。」

「ピンポーン。」

「・・・う　　ん・・・。なんだか知らないけどもう少し怪盗をやってみようかしら。」

「わーい! ありがと、ジャンヌ

フィンはもう大覇者儀です。

「ところで、どうやつたらジャンヌからまたまろんに戻れるのかしら?」

どうやら変身の解き方は知らなかつたそうです。

「髪をまとめているリボンを解いてみて。」

「いひへ。」

ジャンヌはポーテールにして纏めている赤いリボンを解きました。するとジャンヌの周りに光が舞い、ジャンヌはまるんになりました。

「本当だ。」

「でしょ、これからもよろしくね。神風怪盗ジャンヌ。」

「……うん、判つた……。」

まるんは緊張しながら承諾しました。

翌日

“ペペペペペペペペ”

まるんはベッドの上の田覚まし時計の音で田を覚ました。

「あふ～～。なんか変な夢を見ちゃった。緑の髪に天使の女の子にドロボウを頼まれてしまつた……。」

まるんは寝ぼけつつも壁にかけてあるカレンダーを見ました。なんと今日は……。

「あ、そうか。今日は高校入試だつたんだ……。」

まるんはセーラー服に着替えてその上にエプロンをつけて身支度をしませて、朝食の準備をしよつとしました。

台所では。

「ハローー！まるん、おはよー！」

フィンが待つていたのでした。

「夢じゃない……。現実だ……。」

今日からフィンがまるんの家族としての生活が始まったのです。

「今日は、例の入試だつたんだつて……！フィン、応援してます！」

可愛くて無邪気な準天使フィンはしばらくまるんの家出居候することになりました。

桃栗高校に着いたまろんは都に逢いました。

「おはよう、都！」

「おはよう、まろん。」

都はしかめつ面で腕組をしていました。髪はつなじのところで切り添えられました。たぶん、帰宅後母に髪を添えてもらつた後でしそう。

「どうしたの？ その髪？」

「ジャンヌつておかしな怪盗に切られたのよ。」

「それは、大変だ。」

「ジャンヌめ。今度あつたら髪の毛の弁償をやせしやる。」

都は窓にむかって、決意を固めました。

〔暫く、三つ巴の戦いになりそうね。〕

しかし、まろんは怪盗ジャンヌになつて町中の美術品に潜んでいの悪魔を回収する日々が始まりました。

(後書き)

豪く時間がかかりましたがやっと完成しました。

その後、まろんちゃんも都ちゃんも高校の入試に無事受かり、途中で転校してきた名古屋稚空くんと高校生活を送ることになりました。その稚空くんは怪盗シンドバッドになって黒天使アクセス・タイムと共にジャンヌの邪魔をしますが結局はチエス駒はジャンヌが全部揃えてしましました。そしてフィンは使命を終えて天界に帰還しました。果たして、どんな正天使になるのでしょうか。
結果はアニメで「」覗ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837q/>

神風怪盗ジャンヌ 第零章地上に舞い降りた天使

2011年10月6日20時28分発行